

常盤塾議事録

日時：2017年4月22日（土）10：00～13：00

場所：新国際ビル MBFハウス

文責：常盤塾ライター 秋元裕太

メンバー：常盤先生、片平先生、松永さん、古城さん、大下さん、丸山さん、松山さん、白井さん、古川さん、安梅さん、松崎さん、今田さん

アジェンダ

1. 一分間スピーチ
2. 常盤さんのお話し
3. 古城さんの発表 『サピエンス全史』

(1) 一分間スピーチ

・古城さん

分子のカーレース。分子の設計で速さが決まる。トントン相撲を分子のレベルでやっているようなもの。将来的には薬を体内で運んだりするのに活用されたり。日本はトヨタが支援。再生医療は日本が最先端。

・松永さん

分子ロボット。ヨーロッパやアメリカでのヒューマンブレインプロジェクト。アメリカでは軍が主導。ブレインイニシアティブ。中国にスーパーコンピュータで負けているため、この分野に関してはアメリカの威信をかけて研究が進められている。

・白井さん

ポテトチップが少ないというニュース。お茶も今年は遅くなるのか。天候も踏まえ、種をまくのいつにするか。自然との融合したところに初めて偉大なものができることの表れ。

・大下さん

ニュースバリューがあるもの。カムチャッカでは大爆発がいっぱい起きている。研究者の中で、縄文時代の価値はあまり認められていない。研究する意味がないとか。本当にそうか。また、イグノーベル賞みたいなものをもっと増やしてもいいのでは。

・松崎さん

花王ミュージアムに9年振りに行った。牛乳石鹸さんの工場見学も行った。花王さんと企業規模は違えど、両企業に通ずるものがある。「東の花王さん」と言ったりも。今マーケットは100億くらい。いいホテルには固形の石鹸が置いてある。欧米は固形石鹸にシフトしている。アジアは液体石鹸の方がステータスが高い。

・片平先生

ブランディングとかマーケティングというワードをみんな使っているが、~ingはありえない。「極力ブランディングとは言うな」と周りには言っている。では、なんと言うか。「持続的な笑顔の循環」=3S (Sustainable Spiral of Smiles)と言う。とらやとかエルメスといった典型的なブランド企業ほど、ブランドとは言わない。実体のないものや訳せないものとかくカタカナで言う。

・丸山さん

日本はホワイトカラーの生産性が低いと言われる。しかし実際はブルーカラーも生産性が低い。日本人はおもてなしの精神で過剰なサービスをしている。おもてなしの領域を超えている。対価をしっかり払うこと、無形なものへのお金の支払いが。日本で一番遅れている産業はサービス産業。本来取るべきお金を取りきれていない。欧米は価格表がきちんと存在している。おせっかいの文化が日本には多い。他人が要求していないものを提供する。その文化は、受ける人受けない人がいる。Amazonは自分の配達システムを持つべきなのでは。「ものを売る」ということは「ものを運ぶ」ことと同意なはず。ビジネスモデルの転換が今迫られている。Amazonはリアル店舗に出始め

ている。買い物全体のうち配達が必要なのは5%ほど。残りの95%の市場はリアル店舗。バーチャルの人たちがリアルに出てきているのはいまの流れ。

・ **松山さん**

台湾と中国へ出張に。山東省に秦の時代の料理店がある。職人文化が残っている地域。中国にもB級グルメがある。

・ **安梅さん**

老年的超越。人間は生まれてから何度も超越を起こす。思春期とかが最たる例。いろんな病気になることも超越とも言える。「変な奴」は超越で説明できるかも。トランセンデンス。

・ **古川さん**

リスクと不確実性の違い。リスクは確率で表現できるが、不確実性は確率で表現しにくい。意思決定の際、リスクに対しては科学的・効率的に対処していくが、不確実性と向き合うためには理念や信念・哲学がないと決断ができない。判断ではなく決断。

・ **今田さん**

ニュージーランドは恐ろしく後進国。とにかく流通がプア。またどのアンケートもたった一言。「このサービスを人に勧めますか」という究極の質問のみ。経営学の考えが実際の会社に受けている例。小売りが存在しない。工業製品は高い。4PのPがこんなに意味を持つ国はない。日本食は結構ある。特に寿司は大衆フードで日本におけるラーメンのようなもの。

(2) 常盤さんのお話し

世の中には光と影がある。ものごとの光の部分だけ見て、影の部分を忘れてはいけない。Amazonなどはその光の部分だけが注目されているが、実際には影の部分が存在する。エリートやお金持ちは光しか見ない。その裏側を上手に刺激

したのがトランプ大統領。フィリピンのドゥテルテ大統領も同じ。ものごとの裏側にも目を向けなくてはいけないよという一種のシグナル。資本主義とかグローバルリズムに「反」がつく時代。今まで人間は光の部分しか議論してこなかったことの表れ。西洋の知だけではやっていけない。東洋の知が必要。それらを融合することで第三の知を作り出すこと。

山伏・修験道の話。山形の出羽三山。山伏の聖地。最近は山伏修行する人が増えている。特に女性が多い。30人中、女性20人男性10人など。男性は社会学者や脳科学・精神心理学の研究者が多い。修験道というものに対する関心が今高まっている。今までとは違った価値観に対する関心。「神」の存在を考えると普段と違うざわざわ感がある。神仏習合の考え方。宗教は問わない。山岳信仰。自然と一体化することによって自分が仏になる。即身成仏を求める。これらは、世の中の行き過ぎに対する抵抗。「考えるのではなく感じる」こと。感じることでものと一体になれる。修業を通じて、自分と滝が一つになる。初めて自然と一体になり、そしてそこで感じたものをベースにものごとを考える。まず「感じて」から考える。

羽生結弦選手。少し前に世界最高点を記録。「自分がスケートしている時に風のようなものを感じた。自然の中に溶け込んでいる感じ」まさにこの言葉。一体になると、どこまでが自分でどこからが自然かわからなくなる。中島敦の短編小説。『山月記』や『名人』という小説。弓を使わずに弓を射る。弓と自分が一つになる。

修験道は口伝。仏教のような書物はない。書いてしまうとそれが一つの答えになってしまう。答えを決めつけられないために書かないことが原則。全てのものはつながっているから部分として取り出すことはできない。仏様でも神様でも自然でも、我々はすべてとつながっている。生と死を神というものが介在している。つながっているということを昔の人は理解していた。自然という漢字は「自ずから然り」と書く。西洋のnatureを自然と訳してしまったことは失敗。西洋人の考える自然と日本人の考える自然は違う。その差異を認識すること。西洋におけるnatureとは、「人間と対峙するもの」。

死とは何か。生きているということも死んでいることも一つ。別々のことと考えない。死ぬということと生きるということとはつながっていて、死ぬことはすなわち次の生の始まり。そこを媒介するのは水。インドのウパニシャド哲学。お医者さんが水曜日に休みが多いのは、「水」を大切にしているから。

(3) 古城さんの発表

(『サピエンス全史』)

- ・ 著者はイスラエル人歴史学者。エルサレムのヘブライ大学教授。
- ・ なぜホモサピエンスだけが生き残ったのか。体格や脳の大きさではネアンデルタール人の方が勝っていたが、サピエンスは虚構（フィクション）による認知革命が成し遂げた。「サピエンス」は「知性」の意。
- ・ 資本主義や共産主義といったイデオロギーも一種の宗教。
- ・ 人間が神の存在を気付いたのはいつか。虚構（フィクション）と神の存在との関連性はあるのか。
- ・ 陰口こそが言葉そのものの原点。言葉は猿の毛繕いの代用のツール。それによってコミュニケーションや情報の共有が可能に。
- ・ アイデンティティなんて存在しない。自分なんて虚構のもの。社会ができたからこそ自分という虚構も生まれた。人間＝「人と人之間」であるように。
- ・ 哲学的な議論でよく出てくる話題で「自分で自分を知っている人は大したことない」というものがある。自分という存在に対して、周りの人たちはそれぞれ異なる考えを持っている。自分が思う自分自身とは、それらの中の平均に過ぎない。
- ・ 狩猟と農業。不確実性と効率性の違い。
- ・ 少ない人口で多くの土地を使えた方が絶対に幸せ。多産社会こそが諸悪の根源かもしれない。人口は減らすべき。
- ・ 人間が熱帯雨林を出たのは、闘いに負けて逃げたから。そこから農業が始まった。人間が追い出したのではなく追い出された。
- ・ ゲーテの詩。家庭の幸せを考えられる人間ほど幸せ。
- ・ 虚構の貨幣を持つと人間は幸せになる。持てばみんなが幸せになるということを誰もが信じているもの、これこそが貨幣。

- ・社会の仕組みの方の虚構をどう作るかという方が難しい。ビットコインなど。

○次回以降の発表予定

- ・5月 常盤先生ご著書 (発表者：全員)
- ・6月 『サピエンス全史』 (発表者：松山さん)
- ・7月 『サピエンス全史』 (発表者：大下さん)
- ・8月 『サピエンス全史』 (発表者：松永さん)
- ・9月 『サピエンス全史』 (発表者：庄司さん)